三遊亭小遊三 スペシャルインタビュー

Rakugo storyteller KOYUZA SANYUTEI special interview

サッチモを愛し、トランペットも嗜む名落語家

昭和四十一年から放送が続いている人気テレビ番組『笑点』のメンバーでおなじみの三遊亭小遊三さん。

噺家としての顔以外にも、昭和三十九年の東京オリンピックの聖火ランナーであり、昭和四十一年に山梨県卓球選手権優勝。平成十年には世界ベテラン卓球選手権大会出場も果たし、「らくご卓球クラブ」のヘッドコーチでもある。

そして何を隠そう、ジャズ＆音楽ファンには大注目の噺家ディキシー・バンド“にゅうおいらんず”のバンドのリーダーでトランペット＆ヴォーカル担当としての顔も持つ。

八月上席（八月一日～十日）の浅草演芸ホールで、“にゅうおいらんず”の特別興行【P9 参照】を控える中、ジャズと音楽の話を中心に語って頂きました。

（※今回は師匠でなく、さん付けで呼ばせて頂きました。）

【五月九日（木）「喫茶 楽屋」にて　取材・文：加瀬正之】

◎最初に音楽との出会いについて聞かせて下さい

僕は昭和二十二年生まれなんですけど、戦後直ぐで当時は全ての音楽を聴いていたというか、聴かされていたという時代だったんです。生まれた年にジャズとかウェスタンとか、そういう音楽が流行ったでしょ。それから、当時日本では笠置シズ子さんとかの音楽が人気があって、その後にシャンソンが流行って、中学生の頃にはアメリカン・ポップスやハワイアンが流行ったんです。その後、エルヴィス・プレスリー、日本では坂本九の「スキヤキ（上を向いて歩こう）」が大ヒットして、高校生の時にラテンがガンガン流行ったんです。それからベンチャーズ、高校を卒業する頃にビートルズが流行ったんです。ベンチャーズなんて今聴くとおとなしい曲だけど、あれが騒々しいと言われた時代だからね（笑）。今と時代が違って面白いもんですね。ビートルズの後にはリズム・アンド・ブルースとかが流行って、それで僕は噺家になっちゃったんです。ですから、いい時代に育ったと思いますね。うちのお袋は明治生まれなんですけど、明治生まれでも「バッテンボー（ボタンとリボン）」みたいな曲は知っていましたから。それで、僕はこの曲を出囃子に使っているんですけどね。洋楽が自然に入って来た時代でしたよね。

◎当時はジャズも自然に入って来たのですね

高校を卒業したくらいの時、スタン・ゲッツがアストラッド・ジルベルトと演奏した「イパネマの娘」なんてのが凄くヒットしたんです。友達から「これがクールジャズだよ！」なんて聞かされて、こういうジャズなら静かでいいなあと思ってね。当時はジョン・コルトレーンなんかが凄かったんでしょうけど、僕はそこまでのめり込むことはなかったですね。ジャズ喫茶に行ったりすることもなかったですが、「マイ・フェイヴァリット・シングス」とかポピュラーな曲をジャズで演奏したりして、のめり込まなくても聴こえて来ましたよね。

◎ジャズと落語の世界は似ているところがあると思うのですが、小遊三さんはどう思われますか？

ジャズと落語はやっている人の雰囲気が似ているんじゃないでしょうかね。ジャズはアドリブでしょ。スタンダードを演奏する中でアドリブが中心で、噺家も古典落語とか皆がやる話がありますけど、皆と同じようにやっていたんじゃなかなか難しいですからね。その辺の雰囲気というか、ちょっと工夫してみようかなんて言うようなところは似ているんじゃないでしょうかね。落語は自由なところもありますからね。あと、落語は師匠がいて、師匠に

入門しないと噺家にはなれませんし、その師匠も同じように師匠がいて噺家になったわけだから、その線というのはずっと繋がっていますよね。

◎ジャズも巨人と言われる昔の偉大なミュージシャンたちの演奏を大切にして継承するような部分もありますから、その辺りはよく似ているかもしれませんね

噺家では、この人の噺だなっていうのがわかりますよ。この系統の噺をやっているなとか、もとはここだなっていうのは何となくわかりますね。

◎ジャズと落語とのコラボレーションもありましたね

昔、「ジャズと落語の会」ってあったんですよ。あれは行田よしおさんが仕掛けたんです。都市センターホールで圓生師匠（六代目三遊亭圓生）を呼んでやったことがあるんですよ。その時は、圓生師匠が一席やった後に北村英治さんが演奏したんです。あと、この前は小朝さん（春風亭小朝）が独演会で怪談噺をやった時、雰囲気出すために高座にジャズ・ベーシストを上げて効果音を使ったりしていましたね。お客さんには新鮮だったでしょうね。

◎トランペットの出会いについて聞かせて下さい

僕は装飾品として質流れのトランペットを買ったんですよ。それは随分前のことで、三十年くらい前ですかね。やっぱりつい吹いてみたくなるじゃないですか。でも、うちの者に「うるさい！」って言われましてね（笑）。それで、じゃあいいやって放ったらかしにしていたんです（笑）。

◎平成九年に結成された噺家デキシー・バンド“にゅうおいらんず”の結成の経緯について聞かせて下さい

ある時、楽屋で色々話していた時、「自分は昔バンドをやっていた」とか「ブラバンに入っていた」とか「ブルーグラスやっていた」とか、「えっ、そうなの？」という話になって、「それならバンドやろうか！」っていう話になったんです。楽器の編成を見たらバンジョーがあって、デキシーランドなんですよ。トランペット希望は何人かいてね。昇太さん（春風亭昇太）もトランペットをやりたかったらしいんですけど、柳昇師匠（春風亭柳昇）がトロンボーンをやっていたんでトロンボーンにしてもらったんです。僕はトランペットを放ったらかしにしたまま吹いていなかったんで、私だけですよ、最初音が出なかったのは（笑）。でも、やり出したら面白いですよね。それからは皆、私待ちです（笑）。私の音が出れば何とかなる！（笑）。そういう状態だったんですけど、最初に皆で集まった時は「俺は学生時代こうだった、ああだった」なんて話すだけ。飲み会だけで一年経っちゃったんです（笑）。その頃は柳昇師匠がまだ存命でね、あの師匠が根っから音楽が好きだったんですよ。それで、喜び勇んで参加してくれてね。柳昇師匠が特別ゲストで参加してくれれば、寄席で演奏できるだろうということで、それで、浅草演芸ホールでやらせてもらえることになったんです。

「横浜旭ジャズまつり 2018」でトランペットを吹く小遊三さん

◎“にゅうおいらんず”のバンド名の由来について聞かせて下さい

飲んでいる時に僕が「どうせ冗談でやるんだし、落語家なんだから、花魁に引っ掛けて“にゅうおいらんず”でいいじゃないか！」って言って決まったんです。

◎“にゅうおいらんず”のメンバーについて

柳昇師匠も亡くなって、メンバーもだいぶ入れ替わったりしましたが、ここ数年は現在の七人でやっています。（現在のメンバーは、三遊亭小遊三：リーダー兼トランペット、ヴォーカル、春風亭昇太：トロンボーン、ミーカチント：ソプラノサックス、春風亭柳橋：ギターバンジョー兼 MC、桂伸乃介：キーボード、ベン片岡：ベース、高橋徹：ドラムス）。

◎“にゅうおいらんず”のレパートリーについて

最初に浅草演芸ホールで演奏させてもらったら、面白くなりましてね。それで、レパートリーを何とかしなくちゃいけないということになったんです。中川喜弘さんは落語が大好きなので、中川喜弘さんが譜面を全部くれたんです。譜面も簡単に読めるように手直ししてくれたりして、だんだん吹けるようになったんです。

◎八月の公演のリハーサルはされているのですか？

リハーサルは公演の初日、二日、三日（笑）。曲目決める時は集まりますけどね。あとは自分で練習をやって来て、初日に楽器を搬入して、その時にいっぺん音合わせしなきゃいけない、それが最終稽古（笑）。

◎“にゅうおいらんず”に加入したいという若手の落語家さんもいらっしゃるのではないですか？

ん～、加わりたいヤツはいないんじゃないかね（笑）。毎年浅草演芸ホールで十日間、寄席の大喜利でやっているだけですから（笑）。落語がメインで一席やって、大入りのところで演奏するだけなので、僕らにとって十日間が練習日であり、本番でもあるんです（笑）。一年に十日間しかやらないんですから（笑）。

“ にゅうおいらんず ” のメンバー

◎小遊三さんは昨年の「横浜旭ジャズまつり」にドラマー高橋徹さんのバンドにゲストとして出演されましたね

あれは徹さんと一杯飲んでいる時に誘われたんです。徹さんが「大丈夫、大丈夫！」って言うから、「そ～お？」ってついうっかり言っちゃったんですよ（笑）。もうね～、日にちが迫るにしたがって嫌で嫌で逃げ出したくなっちゃいました（笑）。

◎以前、「噺家ディキシー・バンド にゅうおいらんず 10周年記念ライブ」という DVD 作品をリリースされましたが、今後アルバム等のリリース予定はありますか？

ないですよ（笑）。寄席で受けりゃいいんですから（笑）。音を残すということはあり得ないですし、僕らは音を残して欲しくないんです（笑）。“ にゅうおいらんず ” という名前だけ残ればいいんです（笑）。「昔あったんだよ、噺家がバンドやってたんだから！」なんて、伝説みたいに言われてね（笑）。なるべく証拠は残さない、完全犯罪みたいにね（笑）。

◎小遊三さんが影響を受けたジャズマンは、やはりサッチモ（ルイ・アームストロング）ですか？

サッチモは子供の頃から聴いていますが、ジャズっていうとサッチモでしたからね。「聖者の行進」や「マック・ザ・ナイフ」「ハロー・ドーリー」でも、サッチモが歌っちゃったら、全部受けちゃうもんね。それはどうにもなんないですよね。だから、サッチモという存在はイコール＝ジャズですね。あと、デキシーランドっていうのは親しみやすくて元気が出るというか、そういう感じですね。たぶん“ にゅうおいらんず ” を結成する時にバンジョーがいなくても、サッチモをやっていたと思うんですよね。トランペットを持った時にも、「聖者の行進」だけ吹けれりゃいいって思いましたし、それが僕の最終目標です（笑）。

◎他に好きなジャズのアーティストは誰ですか？

やっぱり、サラ・ヴォーンね。あと、トランペッターは皆いいね。当時映像を見ていたわけじゃないから、音しかわからないんだけど、今になって色々な曲を映像で見てみると皆いいですよね。「ワーク・ソング」とか、ああいう曲。トランペッターは全員いいですね～。

◎マイルス・デイヴィスはよく聴かれましたか？

一番最初に衝撃的だったのは映画「死刑台のエレベーター」ですね。「映画の中でずっと吹いていたんだよ」って言われて、それは凄いなと思ってね。映画の内容はあまりよくわからなかったけど（笑）。だけど、マイルス・デイヴィスって凄いんだろうけど、僕でも出来そうだなあなんて思う時もありますけどね（笑）。

◎例えばですが、サッチモを歴代の噺家さんに例えるとこの人に似ているという人はいますか？

先代の金馬師匠（三代目三遊亭金馬）かもね。何でも出来ちゃう人で、万人に人気がありましたからね。

◎お気に入りのアルバムを三枚挙げて下さい

中川喜弘さんの『大きな古時計』。私にとって、このアルバムがバイブルなんです！あとはサッチモのアルバムかな。レパートリーが多いし、何でもやっちゃうでしょ。

◎噺家になる前、ミュージシャンに憧れることはなかったのですか？

そんなのないですよ（笑）。どっちかってと言うと音楽は不得意な分野でしたし、僕は体育会系ですから。音楽は一番苦手な分野でしたけど、色々聴いてはいました。聴くぶんには自由ですからね（笑）。

◎普段はどんな音楽を聴いていますか？

子供の頃から色々な音楽を聴いて育って来た中で、日本では昭和歌謡が流行って、石原裕次郎や小林旭の人気があって、そういう昭和歌謡もよく聴きますね。あと、何だか知らないけど、一時期テンプテーションズを夢中になって聴いていました。音楽は分野にとらわれず、幅広く何でも聴きますね。でも、専門的なところは一つもないですよ。

◎トランペットの前に楽器は何かやっていたのですか？

ハーモニカ！ 映画「アラモ」の曲「遥かなるアラモ」が吹きたくてね。でも、直ぐに飽きちゃいましたけど（笑）。楽器は何かやってみたいなあっていう気持ちはあったんですけど、当時は皆、猫も杓子もギターだったでしょ。フォークが流行ったりしてね。とりあえず指は動かねえと思って、見ただけでギターは諦めちゃってね（笑）。それで、ウクレレだったら何とかなるかなと思って、ウクレレも買ったことがあったんですよ。でも、ウクレレは三日もしないうちに誰かが持って行っちゃったんです（笑）。

◎出囃子で「バッテンボー」を使われていますが、出囃子はどのような経緯で決められたのですか？

出囃子っていうのはお囃子さんが、この子にはどんな曲がいいだろう、こんな曲が合っているんじゃないかって考えてくれるんです。それで、僕は「春はうれしや」という四季節をお囃子さんが弾いてくれてたんです。もう亡くなってしまった森御師匠に「あんたはこれよ！」って言われて使っていたんですけど、鶴光さん（笑福亭鶴光）が同じ出囃子だったんです。大阪と東京でそれぞれやっているぶんには絶対にかち合わないからいいんですけど、一度 HNK か何処かで鶴光さんと一緒になったんですよ。それじゃあと、その時は僕が「猫じゃ猫じゃ」を弾いてくれますかねと出囃子を違う曲で頼んだんです。それから、鶴光さんがうちの協会の準会員みたいな形で東京の寄席に僕より出るようになったんで、これはまずい、何か考えなきゃいけないって思ってね。それでお袋が唯一知っていた洋楽で、僕も映画「腰抜け二丁拳銃」で好きだったんで、当時の若いお囃子さんに「バッテンボー」でお願いしますって頼んだんです。でも、昇太さんの出囃子が「デイビー・クロケット」で、僕と二人の出番が重なると「デイビー・クロケット」と「バッテンボー」で、どこの寄席だかわからないよね（笑）。

◎舞台でトランペットを吹いている時と高座に上がられている時では意識的に大きな違いはありますか？

もう、間違ってもいいやってね（笑）。最初はね、恥かきたくないとか、音が出るかな？とか、そっちの心配でもうどうにもならなかったんだけど、この節はもう間違えても、音が出なくてもいいやってね（笑）。バンドにプロがいるから、その辺はすごく安心感があるね。

◎ジャズクラブから出演依頼が来たら考えますか？

いや、考えない（笑）。それはダメっということで（笑）。

◎ニューオーリンズにあるサッチモの銅像を見に行かれたことはありますか？

ニューオーリンズは「行こうよ！ みんなで！」って盛り上がったこともあったんですよ。そしたらハリケーンが来ちゃったんです。バンドを作った当時は皆同じ方向を向いていたんだけどね。今はバンドでちょっと遊んでやろうという人、落語やんなきゃという人、金稼がなきゃという人、あと協会の事務員もいますから（笑）。だからね、もう無理です（笑）。年一回、毎年八月に浅草演芸ホールでやることはみんな諦めていますけどね（笑）。

◎八月の公演では歌も歌われるのですか？

やりますよ！ 昇太さんの意見なんだけど「もうデキシーランドにこだわらず、わかりやすいのがいいですよ！何か歌いたい歌ないんですか？」って言うから、歌いたい歌ってそうはあるもんじゃない。そのうち何かないかな？ ピーナッツの曲なんか派手でいいじゃないって、でもトランペットで高い音が出なくてね（笑）。じゃあ、黛ジュンの「天使の誘惑」！ 何となくトランペットも良さそうだからね。それで、音が出る範囲で譜面を書いてもらって練習する。俺は絶対やるよ！「天使の誘惑」はカラオケで練習しようと思います。

◎昇太さんは“にゅうおいらんず”でトロンボーンを演奏されていますが、『笑点』のメンバーでジャズバンドを作るとしたら、他のメンバーの方たちの楽器のイメージを聞かせて下さい

まず、隣の好楽さん（三遊亭好楽）がクラリネットかな。木久扇師（林家木久扇）は何かな、パーカッションだな、頭もパ～って感じだし（笑）。それで、三平さん（林家三平）はピアノ。楽ちゃん（三遊亭円楽）は何だろう、ベースかな。たいちゃん（林家たい平）はドラムかな。

◎小遊三さんの夢は何ですか？

今は休みたい！（笑）。僕らはメリハリのない人生でダラダラとずっとやっているんですよ。地方興行とか忙しい時はそっちに行っちゃうでしょ、それがないと寄席に出てますからね。間が空いていないんですよ。寄席は大勢出るし、持ち時間もそんなにないですから、一日で十五分かそこらですよ（笑）。それで「お先！」ですからね（笑）。休むわけにいかないでしょ。もっとわがままで名もあり実力もある偉い師匠たちは「俺はここ出ないよ！」とか、そういうことやるわけですよ。自分でメリハリ付けて、その間にネタをやったりしてね。僕はそういうことはやらないから（笑）。とにかくずっと休んでいないから、思考としてもここからここはこうとかってことが一切ないし、朝起きて「今日は何処？ 末広亭？」「じゃあ、行って来るわ！」ってね。あと、ネタもパッと決められないですからね。決めたって前の人がやっちゃったら出来ないからね。後から出る人は先の噺を避けて、高座に出る直前に決めなきゃいけないんです。同じネタは絶対に出来ないですからね。客席から「聞いたよ、それ！」なんて言われちゃうからね（笑）。

◎一ヶ月休みがあったら行ってみたい場所ややってみたいことなどはありますか？

貧乏性だからね。落語と卓球とゴルフが出来て、ゆっくり飲めりゃいいですね（笑）。でも、そういうことは今までないですよ。バブルの頃は海外にも行きましたけどね。それ以降はないですね。だからって、自分でスケジュールを立ててここへ行こうとか、そういう気力がない（笑）。

◎ジャズの場合、この人を聴けとか、このアルバムを聴けという本などもありますが、落語の場合、初心者に薦めるとするとどの辺から入るのが良いですか？

落語の噺っていうのは、その時に聞いた噺によって運不運というのもありますけど、柳家の芸風っていうのは非常に分かりやすいなって思いますね。柳家の人たちがやるネタというのは、割に寄席の基本的なネタを多くやりますからね。

◎落語を聞いたことがない人たち、落語を全く知らない若い世代の人たちに落語の魅力を伝えるとしたら、どのような点ですか？

二つありましてね。寄席の落語と各個人の独演会とか、ホールでの落語や落語会とか。そういう寄席とは異なるものがあるんですけど、まあ、聞いて頂ければどっちだっていいんですけどね。寄席はチケットで予約や前売り券なんてありませんから、ふらっと来て入っていつ出て行ってもいいし、気楽に聞いて頂ければいいんです。それぞれ雰囲気が違いますけど、寄席の方が肩肘張らずに聞けますよね。寄席は昔からの興行形態と変わらず昼夜通してやっていますし、時間に束縛されませんしね。何となく敷居が高いようなイメージもあるんですけど、そんなことはないんですよね。

気さくで粋な小遊三さん（「喫茶 楽屋」にて）

◎落語の未来について

僕らは惚れてこの世界に入ったんだけど、末広亭で聞いてから五十年くらい。変化っていうのは相当していますよね。ここ何年かで女の人が入って来ましたね。今のところ入って来る女性が「八つぁん熊さん」やりたがるんだけど、それだと損だと思うんですよね。そうでない落語を女性がこしらえて行くんじゃないですかね。そうすると大分変わって来ると思うんですよね。あと、将棋の藤井くんみたいに一人誰か出て来るとね。それでマスコミは飛びつくんだから。野球はサッカーにやられちゃっていた時に野茂がメジャーで新人王獲って、それからイチローですからね。それで野球は何とかあの時代にサッカーに負けなかったですよね。若い時に芽が出て、際立たないと周りも注目してくれないんでね。僕らが若い時に落語が停滞していた時代があって、その時は小朝さんがドーンと出て来ましたよね。今は結構大勢いて、絶対数が多くなっているから、厳しいですよね。二十代の若手で凄いのが一人出てくれば、大丈夫なんじゃないかな。

◎ The Walker's 読者にメッセージをお願いします

やっぱり音楽ともう一つ、そこに笑いが加わると完璧でしょ。

インタビュー後、新宿末広亭で小遊三さんの生の落語を堪能。この日は「蜘蛛駕籠」を披露してくれました。また、新宿末広亭では五月上席から小遊三さんが会長代行兼副会長を務める「落語芸術協会」の新真打ち披露興行が始まっていた。瀧川鯉斗、三遊亭藍馬、立川吉幸という三人の真打昇進披露口上という貴重な場面も体験。小遊三さんと共に『笑点』のメンバーでもある三遊亭円楽さんも駆けつけ、桂米助さんと小遊三さんが舟木一夫を歌い、小遊三さんの音頭で三本締めが行われた。昭和の時代にタイムスリップしたかの様な寄席の雰囲気、寄席で聞く落語の楽しさとライヴ感も体感。改めてジャズと落語の世界は似ているなあと感じました。（加瀬）